



「第二次日本経穴委員会」便り

～第11回 日本人は足が短い？～

第二次日本経穴委員会作業部会委員 うらやまひさつぐ 浦山久嗣

経緯

昨年10月に行われた第3回WHO非公式諮問会議（京都会議）では、風市穴の位置は3カ国とも「大腿外側で、直立し上肢を下垂して中指頭が当たるところ」で一致したが、骨度分寸や解剖学的表現を入れるかどうかで再検討となった。その後、今年2月の北京ワーキング会議では「中指頭が当たるところ」がどこなのか各国で実地調査をすることとなった。

日本側ではすでに『標準経穴学』（日本経穴委員会編、医歯薬出版社、1989年刊）が実地調査を行い、「膝隙点（膝関節節隙外側中央）の上9寸」という結論が出ているが、民族的な違いも考慮して再調査となった。

出典

風市穴の初出は『肘後方』とされる。『肘後備急方』巻三・治風毒脚弱痺滿上気方第二十一には、大椎穴以下合計19種の穴名（内10種には穴位条文）を収録するが、これには「次は乃ち風市二穴に灸す。兩髀の外に在り。倚りを平らかにして手を垂らし、直ちに髀の上を掩ふ可し。中指頭を大筋の上に当て之を捻じ、自ら好なるを覚ゆるなり」も含まれ、『医心方』巻八・脚気灸法第十二にも『葛氏方』云」としてほぼ

同文を引用する。この条文は郭世余『中国針灸史（天津科学技術出版社1989刊）』によれば魏・曹翕の『曹氏灸経』の佚文という。

また、『備急千金要方』巻七・論風毒状第一や『千金翼方』巻二十六（針灸上）・脚気第六にも、「初灸風市、次灸伏兔、次灸犢鼻、次灸膝兩眼、次灸三里、次灸上廉、次灸下廉、次灸絶骨。凡灸八処」とあり、「第一風市穴：病人をして起こせしめ、身を正して平らかに立ち、兩臂を垂らして、直下に十指を伸ばし、兩髀に掩著して、便ち手の中指頭を髀の大筋上に当たるに点ず…」とある。これが所謂「脚気八処の灸」の初出である。『太平聖恵方』巻第一百・第十六図にも「風市二穴：膝外兩筋の間に在り。平らかに立ちて、兩手を舒下して腿に著け、中指頭を陷なる者宛宛たる中に当つ、是れなり。灸三壯。冷痺に、脚胫麻し、腿膝疼痛し、腰尻重くして、起坐し難きを主る」とあって、「中指の先端が当たるところ」では共通するが、そこが「大筋の上」か「兩筋の間」かでは、「腸胫韌帯」の中央か、その前縁または後縁かになるので、微妙なズレが生じてくる。

ちなみに、『太平聖恵方』巻第一百・第四図には「言語謇澁、半身不遂。七処に宜し。…一に百会穴、二に耳前髮際、三に肩井穴、四に風市穴、五に三里穴、六に絶骨穴、七に曲池穴」

とあり、これが所謂「中風七穴」の初出である。

風市穴はこれ以降、「脚気」と「中風」の特効穴として広く普及するが、正穴として扱われるようになるのは明・劉純『医経小学 (1388年)』巻三・周身経穴賦に収録されてからである。

大腿の骨度と『玉龍経』

『靈枢経』骨度第十四には、身長を「七尺五寸」とした人体各所の計測記事が列挙されているが、大腿部においては、仰人は「一尺八寸 (恥骨上縁→大腿骨内側上顆)」、側人は「一尺九寸 (大転子→膝関節裂隙)」とあるが、伏人については記載がない。また、『銅人腧穴鍼灸図経』巻四・修明堂訣式では、仰人は『靈枢』と同じく「一尺八寸」であるが、側人は「一尺四寸 (大転子→膝関節裂隙)」、伏人も「一尺四寸 (臀溝中央→膝窩中央)」と変更されている。

元・王国瑞『扁鵲神応鍼灸玉龍経 (1329年)』一百二十穴玉龍歌・膝腿無力には、「風市：膝の外廉の上七寸に在り。手の中指を垂らして尽くる処、是の穴なり…」とある。王国瑞の父王開は、竇漢卿の門人であり、竇漢卿の『銅人腧穴鍼灸密語』を子の王国瑞と共に増注したとされるが、原書も増注本もすでに亡佚した。「玉龍歌」の穴位の多くは『銅人腧穴鍼灸密語』に由来する可能性が大きく、これが「修明堂訣式」の影響下にあったとすれば、「膝外廉上七寸」は、「修明堂訣式」側人の「一尺四寸」に基づいた数値と考えられ、事実上は「大腿外側中央」と解釈すべきである。

各国の計測結果

さて、2月のワーキング会議で出た課題を持ち帰った日本側は、計測方法を検討し、各委員で手分けしてできるだけ多くのデータを集めることになったが、「18～25歳の健康な男女100名

以上 (200の膝)」という取り決めが意外に厳しく、担当した委員は大変苦労した。なんとか105名 (210の膝) のデータが集まり、身長平均が165.83cm、「大転子→膝窩横紋外端 (膝関節裂隙)」が38.80cm、「大転子→中指端」が20.65cmという結果になった。したがって、日本人の膝から風市穴までの平均は骨度に換算すると「約9寸 (8.89寸)」となり、これを今回の韓国・大田会議で報告した。

一方、今会議では中国側から、黒人が最も足が長く、白人がこれに次ぎ、東洋人 (中国人) が最も足が短かったが、中国人では風市穴の位置が「膝の上約10寸」という報告があり、韓国側の資料でも中国に準じた数値であることが判明した。

この時、日本側アドバイザーの一人が「日本人が一番脚が短いんだなあ」と呟いたが、それを通訳されてしまい、会議場全体がクスクス笑いに包まれた。「いや、腕が長いのかもかもしれない」と言い訳しても、それに真実が含まれていないことを最も自覚していたのは日本側だった。

結局、中国・韓国の「10寸」に対して日本が「9寸」であったという結果から、会議は「風市穴は骨度分寸での表記は適切でない」という結論を導き出した。「腸脛靭帯の中央か前後か」という問題は残るが、これも、結果的に「中指が当たるところ」と解釈せざるを得ない。したがって、京都会議の「大腿外側で、直立し上肢を下垂して中指頭が当たるところ」で、またもや一致することとなった。

この一事をもってしても、経穴の国際標準化が実現した後であっても、実際に有効な「ツボ」は、臨床家自身が各自の創意工夫で獲得しなければならないことは自明であろう。

(〒980-0014 宮城県仙台市青葉区本町2丁目19-20
荒木ビル2F はり・きゅう移山堂)